

姉崎正治と／の進化論

——第一次世界大戦後のインターナショナルデモクラシーについて——

小野寺 真人

[Article]

Masato Onodera
Masaharu Anezaki and his Social-Darwinism : On the International Democracy after World War I
(Received 26 May 2021)

A Noon of Liberal Arts, No. 11, 2022

プロブレマティク 問題の所在

姉崎正治は一般的には日本における宗教学者の始祖としてその名を知られている。しかし、その姉崎が第一次世界大戦後に国際連盟の設立に尽力したことは言及されていても、そこに姉崎の思想がどのようなメカニズムで連関していたかということについては、現在までほとんど触れられてこなかったといつてよい。^{★1}しかし、小林啓治によれば、第一次世界大戦後において姉崎は社会進化論の「弱肉強食・適者生存」という枠組みに批判的な立場を取り、同じく社会進化論の鍵概念である「相互扶助」という観点を強くもつように至っていることが明らかにされている。^{★2}

しかし、小林がこの「発見」をするまでは、姉崎の社会進化論について有益な先行研究があったとはいいいがたい。例えば近代日本に

おける社会進化論を包括的に扱った松本三之介『利己』と他者のはざままで…近代日本における社会進化思想』^{★3}においても、姉崎の名前を見つけることはできない。

一方、宗教学的見地、あるいは社会思想的見地から当該期の姉崎を研究するものは、概ね姉崎の宗教思想の核である「人本主義」にその焦点の中心を当ててばかりいる。^{★4}

つまりは、こういうことなのである。社会進化論研究者は姉崎の名前を知らないし、姉崎を知るものは社会進化論を知らないのである。

そのことを考えてみれば、先に触れた小林の「発見」は非常に示唆的である。と同時に、それは示唆にとどまるものでしかないといえる。なぜならば、小林の姉崎論は、あくまで同時代の国際秩序構想分析の中に埋め込まれたものであるからだ。無論、第一次世界大戦期という、一般的には帝国主義の全盛期を迎える時にあたって、

社会進化論と国際秩序は大きな連関をもつ。すなわち、「弱肉強食・適者生存」的な社会進化論は国際関係においては、熾烈な主権国家同士の戦争状態を惹起／正当化するし、一方の「相互扶助」は戦後の国際秩序、具体的には国際連盟結成による主権国家同士の共存共栄を導出していくからである。

しかしながら、である。本稿では姉崎の社会進化論を純化した上で抽出することをまずは試みたい。なぜかという、当該期の日本の言説空間において、社会進化論は依然として大きな影響力を有しており、例えば、大杉栄のアナーキズムに大きくその影を落としていたからである[★]。姉崎のデモクラシー構想がいかなる社会進化論にもとづいて展開されるのか。そのことを問うことは、日本国内での民主主義の問題にどう応答するのかということ、国際社会においてどのような民主主義を実現すべきなのか、という両方に関する大きな問いを含んでいる、というのが現時点での本稿の仮説である。

こうした観点が赦されるのであれば、姉崎の社会進化論を国際秩序構想としてのみ捉えるだけでは、その思想的意義を全貌にすることは不可能であるといつてよいであろう。そこで本稿では、次のことを志向する。第一に、第一次世界大戦期の姉崎の社会進化論を純化して抽出すること。第二に、同時代の日本国内における姉崎の立ち位置を理解するために、国際法学者である恒藤恭の思想と比較し、同時代の言説空間の中における姉崎という特異点が何だったのかを明らかにすること、これらである。

これらの志向性からすれば、本稿の視座は社会思想史、国際政治

学、宗教学のいずれかのみであってはならない。まさしく、インターディシプリナリではなく、トランスディシプリナリな思想史こそが要請されることとなろう。

さて、前置きでもあまりにも大上段に構えすぎても仕方がない。以下から早速分析作業に入っていきたい。

第一章 姉崎社会進化論の基礎——『新時代の宗教』を読む

本章では、姉崎が本格的に社会進化論を展開する以前の基礎的な認識地図を、『新時代の宗教』から看取してきたい。姉崎は人間と国家についてこう述べる。

総ての事、人間の為に人間でやつてのけるとして進んだ勇氣には、実に賞賛すべきものがあるが、「人間の為に」といふ事は利害の尺度以外に出ず、利害の競争を万事の力とした結果、人間自らの人格をも、利得成功といふ面に偏した畸形に陥らしめるに至つた。利害本位、現実万能の人間が神意天命を敬しないのは謂ふまでもない事であり、人間相互の間でも、人として人情の結合を遂げ得ないで、人と人と、国と国と、互いに狼となつて噬ひ合ふに至つたのは、人類自ら作り出した運命、至当必然の応報に外ならぬ。大戦の惨禍は、其の害悪の極端を蒙つた国家や個人に対しては特にいたはしいが、而

かも之を人類の共同責任として見れば、人類全体が其の惨禍不幸を分担し、而して其から生ずる覚醒に依つて、人類の罪亡ぼしを行ひ、人類将来の方針を決すべきである。^{★6}

ここでは「神意天命」という宗教的觀念が全面に押し出されているが、注目すべきは、「大戦の惨禍」を「人類の共同責任」と位置づけ、「人類全体」が「覚醒」することによって「人類将来の方針を決すべき」という、人類への信頼と能動性への期待である。

さらに姉崎はこういう。

人類が衷心の反省大懺悔に依つて、今までの文明生活を変革し、人生に対する思想を一新すべしという要求は、最も真挚の声として思想嚮導者の覚醒を促しつつある。利害競争の小天地を脱して、人情結合、人類協同の立場に立ち、人と人と相互に尊重し、人間を神靈の表現として、自他共に人格の靈化発達を目的にすれば、此の如き生活の中には、一切万人が神靈の中に融和する実を挙げ得る。此の信念に基き、此の如き神靈の力を仰ぎ信じて、之を個人生活にも実行し、社会組織にも国際関係にも適用する。^{★7}

ここでも人間を「神靈の表現」として捉えるところに宗教色の強さが伺えるが、重要なことは、そうした人間が宗教を通じて「人と人と相互に尊重し」、「個人生活にも実行」することで、「社会組織に

も国際関係にも適用」していくと位置づけていることだろう。姉崎にとつて人間とは、世界を能動的に構成する一部として見做し、なおかつそのように「靈化発達」しうる／すべきものなのである。

では、そうであるべき人間は、どのように一九世紀を生き延びてきたのだろうか。姉崎によれば、次のようになる。

一九世紀の文明は、工業革命の結果に、ダーウキンが進化説の誤解濫用を併せて、『生存競争』に没頭し過ぎ、個人も階級も国家も、皆相率ゐて此の競争道理に何者かを獲取する外には、何事にも眼を開き得ざるに至つた……(中略)……然るに工場組織必然の結果とは云ひながら、資本と労働と相對して、各自利益の獲取のみに腐心し、何れの国にも此二階級の衝突を來して、其の極は、社会内部の不調破綻を激成してきた。

其の上此の如き大組織の商工業を伸張する為に、国家は各々物資の供給を豊にし、商品販路の拡張を図ろうとし、其為には軍備を具へ、所謂の国際競争は富国強兵の標識を唯一の導きとして、終に世界的大戦争に破裂するまでに立ち至つた。

此に於て、人間の生活が外延的に伸張し、生活の物資が豊富になつた結果、人生の内容は却て、衝突破綻を増し、国家は富強の力を進め得たと共に、人類の生活は、それだけ亀裂を増し、争闘を激くして、文明の意義が何処にあるか、分からなくなつて了つた。^{★8}

姉崎によれば、工業文明こそが「社会内部の不調破綻」や「人類の生活」の「亀裂」を増し、「争闘を激くして」「終に世界的大戦争に破裂」するまでに至ってしまった、ということになる。であれば、姉崎にとって真に文明的な人類のあり方とはどのようなものになるのか。それを見るために、次章では『世界文明の新紀元』をつぶさに分析していこう。

第二章 第一次世界大戦後の姉崎社会進化論—— 『世界文明の新紀元』より

第一次世界大戦後の新たな国際秩序に基づく文明を構想するにあたり、まず姉崎は社会進化論をダーウインそのものに立ち戻って考える。端的には次のような主張となる。

生存競争『此の言を用ひるに當つて、最初に言つておくが、此は広い意味、又形容の意味で用ひるので、一生物が他の生物に依頼する事をも含み、又個体の生命ばかりでなく、子孫を残す上に於て互に依頼する事をも含む。』此が所謂る生存競争を学説的に組織したダーウインの言である。即ち生存競争とは、生物が己れの生存を維持し拡張する為に他を犠牲にする事、即ち他を排斥しての競争も、其の一面であるが、同類が相助けて他に当る事、又天然周囲の変化に適應する事から、都合の好い生存状態を求めて苦勞努力する事、乃至は異

類の生物が相輔け相補つて生存の利益を計る事をも含蓄しての struggle (競争のみでなく、弘く努力奮闘苦勞) である。^{★9}

すなわち「生存競争」は「他を犠牲にする事」と「他を排斥して」行われることは「其の一面」としては認めるものの、都合の好い生存状態を求めて苦勞努力する事」と「異類の生物が相輔け相補つて生存の利益を計る事」に姉崎は重きを置く。

では、それが人間社会に応用される時、どのような理路を形成していくのであろうか。次の史料をみてみよう。

即ち、人生には競争もあるが調和もあり、競争と云ふ中にも、他を排しての競争のみならず、他人に励まされての感情努力もあるに拘らず、生存と云へば競争、競争といへば、他を排せなければならぬといふ様に信じて、個人の間にも、階級の間にも、国民の間にも無慈悲無容赦の競争を激成したのは、一部(或は大部分)誤つた生存競争觀念の結果と云はざるを得ない。^{★10}

こうして姉崎は「人生には」「他人に励まされての感情努力もある」として「無慈悲無容赦の競争を激成」する社会進化論は「誤つた生存競争觀念の結果」と断定する。であるとすれば、人間集団である国家は、姉崎にとってどのように考えられるのであろうか。

勿論国家は一個人と違つて諸種の方面に發展する必要はあるが、それでも無限の欲望などといふ事は空夢に過ぎない。

例へば、国防上、日本は朝鮮海峡を必要とし、又朝鮮の併合を必要としたが、朝鮮の防衛には満洲、滿洲の為にはバイカル、バイカルの為には何々と云はゞ、如何にどれも必要の如くに見えるが、其様な無限の欲望は、必ずしも真に国民の生命を充実し、健全に発達する路でなく、只々膨張する者は、却て内部に弱点欠点を生じて、其の為自ら倒れる。^{★ii}

このようにして姉崎は国家の特徴を「一個人と違つて諸種の方面に發展する必要」があるものとして認めつつも、「只々膨張する者は、却て内部に弱点欠点を生じて、其の為自ら倒れる」として、帝國主義国家の際限のない膨張主義に警鐘を鳴らすのであった。ただし、この点については結語においても総括することにするが、帝國日本の既得權益であつた植民地朝鮮への侵略を「必要」としていることには留意すべきであろう。

そして、これらの社会進化論から以下のような国際秩序構想が導き出される。

あらゆる国民の自由といふ事と、国際関係の道徳にも、個人の良心の判断と制裁とを伸張すべしといふ事にある、人間人格の尊厳と、此を基礎にした国際の正義と云ふ事、此は今回の戦争に依つて一層痛切に連合国の指導者を刺激しつゝる理想

である。此の如き理想が将来に行はれるや否やと危ぶみ、躊躇し遲疑し、形勢を觀望するよりも、我々は此に對する去就を決すべき時期に際会して居る。^{★12}

ここにおいて姉崎は「国民の自由」と「国際関係の道徳」についても、「個人良心の判断と制裁」を「伸張すべし」と唱え、「人間人格の尊厳」とそれを基礎にした「国際の正義」を希求するのであった。それは個人が国際関係のあり方に対しても積極的にコミットメントすべきであるという、一種の「地球大のデモクラシー」構想と評してよいだろう。そしてこれこそが姉崎によつて示される「人類が進むべき文明」に他ならないのである。

第三章 姉崎デモクラシー構想の歸結——『社会の動揺と精神的覚醒』の考察より

本章では、姉崎社会進化論がどのようなインターナショナルデモクラシーへと変貌していくのか、最終的な過程と帰結をみてみたい。まず姉崎は一九世紀文明を総括して、こゝういふ。

驚くべき世紀と呼ばれる第十九世紀に於ける最大運動は、進化説の影響から出た。独り科学のみならず、人生、社会に關する努力でも思想でも、進化説の觀念の影響を受けた事は、大且つ深い。^{★13}

こうして姉崎は一九世紀文明と進化論との関係を再度説く。その悪影響については第一章と第二章で詳述したところである。

次に、姉崎社会進化論と社会主義との関係をみてみよう。姉崎はボルシェビズムについては次のように評価している。

大戦は、大きな震蕩を社会全体又個人各々の心に与へて、世事、人生を革命的に見る傾向を促した、ボルシェビズムも其の一である。(中略)：人間の個性を尊重せず、その目的の爲には、人の生命、財産を没却する事を厭はない。此の精神状態は、戦後の世界、何れの国にも多少とも存在して居るから、レーニンの宣伝なくとも、ボルシェビズムは、都合のよい土壤を諸方に発見し得る。軍隊は戦場より引き上げる時に、ボルシェビズムを抱いて帰国する今日の状態、これは実に世界文明にとつての重大問題である。ロシアはロマノフ王朝と教会との圧迫に対して、殆ど病的になるまで反抗し、遂に今の革命を起したが、世界の傾向の中には、対戦の結果、社会状態と心理状態と、共に謂はゆる過激主義を醸成する精神が見える。各国の同盟罷工が赤化的傾向を示して来たのは、其の一例である。^{★14}

このように姉崎は社会主義については極めて否定的である。しかし、ここで重要なのは、社会主義が「人間の個性を尊重」しないことにこそあり、逆にいえば、姉崎にとつての最大の重要要素は、今まで

みてきたように、各々の人間個性の尊重が、世界大のデモクラシーにまで発展しうる／すべき、という点にあることを等閑視してはならない。そのことは次の史料によっても示されている。

兎に角、現代では、人民全体が共に協同し、人民全体の爲に、社会生活を営む。斯ういふ態度に於て社会生活をする必要ありと共に、斯くの如く生活し得る可能性が増して来て居る。これが現代の社会生活の特色であつて、斯くの如き社会生活をせうとする爲に、今までの封建的遺風を改めなければならず、それから種々の難問をも惹き起こして来た。即ち如何にして人民全体が社会生活を円満にし、その意義を充実すべきか、之が問題である。^{★15}

このように、あくまで姉崎は「人民全体」の「協同」に重きを置き、「人民全体の爲に、社会生活を営む」「可能性が増して」いることを強調してやまない。そのためには、各々の人間個性の尊重は基本的大前提を構成するのである。

では、姉崎にとつて、人間社会とそれを構成する個人との関係はこの時代においてどのように観念されるものなのであろうか。それを端的に示す史料を読解しておこう。

人間社会は有機的渾一体であるといふ見地から見れば、最近世界文明、人類の社会生活には、恰も癌腫が生じつつある。

大戦は要するに、十九世紀文明の最悪な破綻を示したもので、世界何れの国民も其の責任を免れる事はできない。かつ大戦の影響は欧州大陸のみに留まらない。日本人の多くは、欧州戦争と称して、陸戦の事のみ考へ、世界の海にも戦乱が波及した事を考へないが、大戦は其の廣口が世界的であつたのみならず、其の社会的、道德的意義に於て世界的であつた。其の原因は十九世紀文明の欠陥に基き、改造問題を世界文明全体の問題として提供する事に於て、大戦の意味は世界的である。¹⁶*

このように姉崎は「人間社会」を「有機的渾一体」とみなす。そうであるからこそ、第一次世界大戦は、「改造問題」として「世界的文明全体の問題」となりえるのである。

では、姉崎は世界文明全体の問題をどのように解消すべきと考えるのか。姉崎は結末としてこう述べる。

要するに、人生に社会的連絡が増し、人道觀念民本思想が起つて来たのは、どうしても防止することの出来ない勢力であつて、其の現象は十九世紀文明の徳澤であるが、他方にはそれと共に生じて来た財力、武力、権力の結合が、此の文明の健全な発達を害し、そこで種々の葛藤が生じたのである。そこで社会内部の整理、発達には、どうしても国際関係をも健康にする要があると共に、此の内部の問題といふもの、即

ち労働問題、婦人問題、社会奉仕の事業なども、其の原因が世界文明にあり、又その意義も世界的であるから、其の処置も世界的たるを要する。此等問題の解決は、一国、一人ではできない。国も人も、皆共に協同して其の解決に着手しなければならぬ。¹⁷*

こうして姉崎は、「人道觀念民本思想」の発生を「十九世紀文明の徳澤」として積極的に評価するが、一方で「財力、武力、権力の結合が、此の文明の健全な発達を害し、そこで種々の葛藤が生じた」ことを指摘することも忘れない。その「葛藤」も多岐にわたる。「労働問題、婦人問題」までもを射程圏に捉えられていることは積極的に評価すべきだろう。そしてそのことに対して「社会内部の整理」、「国際関係をも健康にする」ことを重要視すると同時に、この問題の解決は「世界的であるから」、「協同」して「解決に着手」することを喚起してやまないのである。

第四章 姉崎正治と恒藤恭——二人のインターナショナルデモクラツト

こうした姉崎の主張は、同時代の国際法学者として著名な恒藤恭の世界民思想と軌を同一にしているともいえる。恒藤に関しての詳細な研究は、別の先行研究¹⁸*に譲るとして、本稿では簡潔に姉崎の思想との意外な相似性について論じておくこととする。

恒藤は「世界民の愉悦と悲哀」において、次のような立場を表明する。

私は生まれ落ちると同時に『日本国民』とされた。

生まれ落ちた刹那に、私自身の意識の裡に意志のはたらきと名状し得るやるなものが微塵も無かつたことは、恐らく疑ひを容れない事実だ。だから、私は生まれ落ちると言ひ度いのだ。^{★19}

恒藤の意識としては、自身はあくまでアプリアには世界民として生まれきたものが、アポステリアに日本国民として「生まれ落ちる」ものとされる。しかし、そうして世界民として生まれたはずの諸国の国民はどのように観念されるのか。

世界民がユトピアの民でない証拠には、彼れは何処かの国家に籍を置いてゐる、例へばイギリスの国籍に、スペインの国籍に、ドイツの国籍に。つまり世界民は同時にイギリスの国民でもあり、或はスペインの国民でもあり、或はドイツの国民でもあるわけだ。尤も世界民はそれを単純な不調と心得てゐる。マルクスは共産党宣言の中で、『労働者には国籍がない』と述べてゐるが、その心持はやがて世界民の心持なのだ。…（中略）…太陽は四六時中何処かしら世界の表面を照明してゐる。だから『自分の国の領土には太陽の没する時がない』

と謂ふイギリス人の自負心の如きは、世界民の唾棄する所だ。世界民には国境がない。世界のあらゆる部分は世界民のための共同の財産であるべきだ。^{★20}

すなわち、恒藤にとつて人間とは、そもそも世界民として生まれるが、いずれかの国家に属さなければならぬものである。とはいへ、その国家に束縛されることは世界民にはありえない。「太陽は四六時中何処かしら世界の表面を照明してゐる」という普遍的事実が世界民を世界民として存在たらしめる証拠となり、「世界のあらゆる部分は世界民のための共同の財産」と積極的に位置づけられる。

そして恒藤は次のように強調する。

一切の人間は世界民の友だちであり、同胞であるけれど、彼らは悉く世界民たるものではない、人間を国民とする法律はあるが、世界民とする法律はない。人間を世界民とするものは、人間自身があるのみだ、人間自身の自覚あるのみだ。^{★21}

このように恒藤は「一切の人間は世界民の友だち」であるが「人間を国民とする法律はあるが、世界民とする法律はない」とも断じる。しかし、恒藤は世界が世界民のものとなることを諦めはしないのである。

そして、恒藤は世界民と国家の関係についてこう述べる。

あらゆる権力の中で最も強大なるもの、最も確固たる組織を具へてゐるものは国家である。だから世界民の権利は、何よりも先づ国家に向かつてすべての人類の自由と幸福とを確保せむことを要求し得ることではなければならぬし、世界民の義務の主要なもの、国家をして斯かる要求にに応じてすべての人類の利益に活動せしめるやう、国家を指導することではなければならぬ。世界民がいづれかの国家に籍を置いてゐるのも、斯かる権利を維持するため、斯かる義務を履行するための方便と視らるべきだ。^{★22}

このように恒藤は「すべての人類の自由と幸福を確保」することを要求することが「世界民の権利」であり、「いづれかの国家に籍を置いてゐる」ことは「斯かる権利を維持するため、斯かる義務を履行するための方便」に過ぎない。

こうした恒藤の志向性を姉崎の社会進化論と比較してみれば次のようにいえる。姉崎にとつては国家や国民は所与の前提であり、問題となるのは、国民や民族が個人として世界平和にどのように関与していくか、ということとなる。恒藤にとつては、個人は世界民として生まれ、国家権力の暴走を最大の問題として捉え、それを抑止するために世界民はそれぞれの国で権利を行使し、世界平和を実現すべきであるとされる。いづれにおいても、恒藤と姉崎のデモクラシー論は、世界民を起点とするか、国民を起点とするかという違いこそあれど、個々人相互の自覚によって、世界大のデモクラシーを

志向してやまいという一点において、同一の双方向的な円環を構成しているのである。

結語——インターナショナルデモクラットとして の姉崎正治

さて、最後に、本稿が達成した成果をまとめつつ、姉崎社会進化論の最終的な評価をしてみたい。

第一章では『新時代の宗教』を分析し、次のような結論を得た。

それは、姉崎の宗教観そのものに相互扶助論的な従来の社会進化論批判のモメントが内蔵されており、それが第一次世界大戦を引き起こしたことへの批判へと強力に繋がる、ということである。

第二章においては『世界文明の新紀元』を次のように評価した。

姉崎社会進化論は相互扶助論に重きを置き個人の人格の尊厳—個々の国家の尊厳—平和な国際秩序を志向するものではあつた。しかし、そこには一定の限界性も潜んでいたことも否めないだろう。それは国家間の軍事的・領土的膨張による世界大戦を二度と起こさないためにはどうするか、という強い問題意識に基づくものであつたが、同時に、既得権益である植民地についての記述は曖昧なものでしかなかった。無論、姉崎は「国民の自由」や「個人人格の尊厳」についても言及はしていたのだが、それが植民地の独立を許容するものであつたと確言することはできない。とはいえ、世界文明の進むべき進路を、個々人の人格の尊厳に基礎を置いたことは積極的に評価

しておいてもよいだろう。

第三章は、『社会の動揺と精神的覚醒』にスポットライトを当て、姉崎社会進化論が社会主義的な革命を容認するものではないことを確認した。それと同時に、個々人の自覚が来たるべき世界文明のあり方を大きく規定すると主張していたことを明らかにした。

第四章では姉崎以外の当該期の国際法学者・恒藤恭の世界民思想と姉崎社会進化論の共通性を明らかにした。そこで得られた結論は以下の通りである。すなわち、恒藤世界民思想であれ、姉崎社会進化論であれ、個々人の自覚こそが世界平和をもたらすものである。ことには間違いがなく、両者は知識人という立場から、積極的に第一次世界大戦後の世界秩序のあり方について、論法を微妙に異にしながらも、相補的な主張を展開していたのである。

これらの成果から以下のような結論が導出される。姉崎社会進化論は相互扶助論を基調としたものであり、既存の国家体制そのものを抜本的に組み替えようとするものではないし、あくまで主権国家体制を基底においた国際協調を模索するものであり、俗言すれば「中道左派」的なものでしかなかった、ということでもある。

しかし、である。だからといって、姉崎社会進化論の総てが色褪せるわけでは決していない、と筆者は考える。なぜならば、帝国主義的膨張主義に対するオルタナティブな抑制装置、すなわち国際連盟の結成を志向する姉崎には、時代的制約が付きまわっているとはいえず、ある程度理想と現実のバランスを模索したものであることには間違いないからである。

それにも増して姉崎社会進化論が志向していた次の点を筆者は高く評価するものである。それは、『世界文明の新紀元』に収められた「戦後の世界がどうなるか、をどうするか」^{★23}という論文の存在である。「どうなるか」だけを問うのであれば、それは分析に過ぎず、時には国際関係論にありがちな現状追認主義に陥る可能性は否定できない。しかし、「世界をどうするか」という問題意識は、自身も世界の一員であり、能動的に世界の問題に介入しようとする積極的な姿勢が看取できる。

姉崎が国際社会においても国内問題においても「民本主義」と「人本主義」を貫徹するその姿勢は、個々人それぞれのあり方が尊重され、人類社会の一員として世界のデモクラシーに人びとの参画を促そうとする、一種の地球市民主義とも読むことができよう。

また、当該期の姉崎のデモクラシー論は、次の点において傑出している。第二次大戦後Ⅱ日本の敗戦後に、核戦争による人類絶滅という破局的事態が予見される時代に、世界連邦建設連盟が創立されたことは周知の事実であるが、その「宣言」は次のように主張する。

優勝劣敗、弱肉強食の四千年、その四千年の前史にわれわれは原子爆弾という大きな終止符を打って全巻を閉じよう。そして世界連邦という真正の力をもって互助協力相互扶助の原理に立脚する新しい人類史の幕を開こう。

国家も民族も階級も結社も、政治的、経済的、思想的一切の行きがかりを捨ててその分岐の最初に帰り、全人類的分業

と協働による世界経済社会に融合し、全人類を打つて一丸とする世界国家を建設し、世界議会と世界政府とを組織しよう。

全世界の人びとよ、平和と希望に満ちた夜明けの鐘が鳴っている。今日よりわれらは共に携えて、真理の旗を高く掲げ、全人類の幸福と文化との画期的な飛躍をはかろう。右宣言する。^{★2}

無論、第二次大戦後の状況と第一次大戦後のそれとを一概に同一視することは避けなければならないが、世界連邦運動においても「優劣敗」と「弱肉強食」の人類史が問題視され、「互助協力」と「相互扶助」という社会進化論の重要な概念と実践可能性とが人類社会の生存と発展の中心を占めているという点では、姉崎社会進化論と相違はない。

無論、姉崎は第二次世界大戦が核兵器の戦争使用によって終結することも、またそのことが東西冷戦を生むことまでもを予見していたわけではない。しかし、姉崎が第一次世界大戦を人類の破局の大きな段階のひとつとして捉え、その意義を新たな国際平和構築の契機と考えていたことは、本稿を通じて疑いようのない事実である。これは誰もが確認できよう。その意味において、姉崎社会進化論は東西冷戦期にまで貫通性のある普遍的価値を有しているのである。

まさに、この点において、姉崎社会進化論のアクチュアリティが顕在化する。いわゆる社会主義者やアナキストが、段階を経ながら社会主義国家——共産主義国家——無政府主義社会を志向するよ

うに、姉崎は無秩序な帝国主義的膨張主義に警鐘を鳴らし、それを解決するために、個人——社会——国家——国際連盟成立による国際秩序として世界平和を志向したのである。繰り返しになるが、それは時代的制約や植民地主義の問題と無関係では決してられないものではあったが、主権国家体制が完全に所与の前提となり、なおかつ、それが暴走していた当該期にあつては、一つの防波堤であつたと同時に姉崎なりの「地球大のデモクラシー」を追求してやまなものであつたのである。

なお、本稿においては、姉崎社会進化論のインターナショナルデモクラシーとしてのアクチュアリティを抽出することに重きを置いたため、宗教学者としての姉崎の宗教観そのものについては十分に議論を展開することはできなかった。その点は後々に解決すべき大きな課題であることを認めて、一旦ここに筆を措こう。

★1 磯前順一・深澤英隆『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡——』東京堂出版、二〇〇二年が、姉崎についての包括的研究かつ伝記であるが、管見の限りにおいて、姉崎の社会進化論についての言及はない。

★2 小林啓治「二大政党制の形成と協調外交の条件」、一三五頁（井上寿一編『日本の外交 第一巻 外交史 戦前編』、岩波書店、

- 二〇一三年に所収。
- ★3 以文社、二〇一七年。
- ★4 そもそも姉崎に関する研究は姉崎の宗教思想が中心に展開されており、社会思想史として議論されているものは少ない。しかし、古賀元章「姉崎正治の宗教論と第一次世界大戦」、『比較文化研究』第八八号、二〇〇九年、古賀元章「姉崎正治の人文主義についての一考察——吉野作造の民本主義と比較して——」、『比較文化研究』一一〇号、二〇一六年、古賀元章「姉崎正治の宗教思想の特徴——彼の人文主義と民本主義に焦点を当てて——」、『Comparatio』、二〇一七年、長尾宗典「第一次大戦期の姉崎正治——雑誌『人文』誌上における「文明批評」と「人文主義」——」、『史境』七四号、二〇一七年などが管見の限り社会思想的見地から姉崎を研究したものとして存在しているが、いずれも社会進化論との連関については完全に等閑視している。
- ★5 大杉は同時代の生物学者にして社会進化論者である丘浅次郎を「師」として仰いでいる。詳細は大杉栄「丘博士の生物学的人生社会論を論ず」、『中央公論』五月号、一九一七年五月一日、大杉栄全集編集委員会、『大杉栄全集』第四巻、ぼる出版、二〇一四年、五五頁を参照のこと。
- ★6 姉崎正治『新時代の宗教』、博文館、一九一八年、二一八〜九頁。
- ★7 同前、二二〇〜一頁。
- ★8 同前、二二二〜三頁。
- ★9 姉崎正治『世界文明の新紀元』、博文館、一九一九年、二七頁。
- ★10 同前、三〇〜一頁。
- ★11 同前、三六〜七頁。
- ★12 同前、八七〜八頁。
- ★13 姉崎正治『社会の動揺と精神的覚醒』、博文館、一九二〇年、一五八頁。
- ★14 同前、一九四〜五頁。
- ★15 同前、二一〇頁。
- ★16 同前、二二七〜八頁。
- ★17 同前、二四二〜三頁。
- ★18 代表的なものに小林啓治「インターナショナルリズムと帝国日本——一九二〇年代初頭の国際意識」、歴史と方法編集委員会編『歴史と方法4 帝国と国民国家』、青木書店、二〇〇〇年、同著『国際秩序の形成と近代日本』、吉川弘文館、二〇〇二年、広川禎秀『恒藤恭の思想的探究——戦後民主主義・平和主義を準備した思想』、大月書店、二〇〇四年を挙げておく。
- ★19 恒藤恭「世界民の愉快と悲哀」、『国際法と国際問題』、弘文堂、一九二二年、三五頁。
- ★20 同前、四二〜三頁。
- ★21 同前、四六頁。
- ★22 同前、五三頁。
- ★23 前掲姉崎『世界文明の新紀元』、七二〜一〇三頁。
- ★24 加藤俊作「運動としての世界連邦論」、日本平和学会編『世界政府の展望「平和研究第二八号」』、早稲田大学出版部、二〇〇三年、四頁を参照のこと。
- ★25 世界連邦建設同盟編『世界連邦運動二〇年史』、一〇四頁。

おのぞら・まさと（日本近現代史・思想史）